

天正十年頃迄は天下大亂、田島作毛不定、郡國相争ひ定法無之に付、何國も錢を以て積り、知行を宛行。漸く天正の末つかたより、次第々々に治平に赴き、地方穀高を以て家臣への祿とす。續武家傳談

貫知行の圖り并歩數其外割物等

○十町四方 此草高千八百石 但一段にして三百歩のつもり。是越中地の歩也。一段の草高一石五升あて。

○草高百石 此歩數二萬歩 此歩數四方にして百四十一間二尺五寸二分

○百貫文 但一錢を地形一步にして

此草高五百石 定納貳百石 免四つ平均にして口米二十二石四斗

一錢に貳合二勺二撮四 銀貳貫五百里 金一枚代銀五百里のつもり 米一石に付代銀十一匁二分四厘

○六百七十四石四斗六升 百貫文の當り但一貫文に三石あて

○定納二百六十九石七斗八升四合 口米三十石二斗一升六

合

×三百石 一石に付代銀八匁三分三厘

○一里四方知行二萬石 越中地にして十里四方二百萬石

○六尺六方には三十石積

○日本の糧米二千八百萬石。但三刻出るつもりにして三千四百萬石

右件々可疑ことあり。但因牧氏筆記耳。

一、甲州流と稱する兵學者

近世甲州流と稱する兵家者流は、多くは北條安房守に出づ。

處士 山鹿甚五左衛門 甲府 佐々木四郎兵衛

酒井雅樂頭 熊谷四郎兵衛 京極家 寺井三右衛門

松平越中守家 杉山八藏 公儀 遠藤伊兵衛

本藩有澤氏は山鹿・佐々木兩人に受たり。

一、異域同調

清少納言が家集の内に、

忘るなよなよといひしにわれ竹の節を隔つる數には有ける

莊子齊物論云。因是已、已而不_レ知其然。謂之道。林註曰。

以下句已字粘上句已字。此是筆端遊戲作文處。愚按文章之

妙至於如此。異域同調。奇哉。

一、罇のはらゝは腫物に即効あり

久しく癒えがたき腫物の類に、罇のはらゝの干たるを水に

浸し、すり鉢にてすり附候へば、大形は一附にてよろしく

候。即効有之候もの兩人有之儀、不破新十郎覺有之旨物語

也。古市作之丞は生き子をすり付候へば、二附にて夥敷たは

汁出で、透と根切いたせしよし申候。錢の腹中に打入たるに、蠅のわたを附候へば、錢の折出候。そのまゝ抜ぬるよし。

一、茶道の弊

後土御門院文明十一年十一月、足利將軍義政其子義尚に世をゆづりて、東山東求堂に閑居し、銀閣を作りて北山の金閣に准ず。東山殿と號す。古器古畫を遊び、又茶器をあつめて年月を送る。茶會の禮式等皆東山殿よりはじまる。是より始めて茶の湯の禮法を世に起せり。

飲食するに禮なくんば有べからず。されば義政卿の茶會の禮式を立られしは、猶理あるに似たりといへども、褻れ汚れたる古器を遊び、用にもたゝぬ古反故などを愛して、甚弊を後世まで残されけるは、大なる罪ならずや。世々を経て此事を好る人々多かりける中に、紹鷗までは器なども有にまかせて用ひ、さのみに奇物を好まず。近き世に至り、千利休と云者出て茶禮を興行し、無益の事を増添し、千貫二千貫の財を費して、用にもたゝぬ茶壺墨跡を交易せり。今の世に及で、唐物の茶壺一を黄金二三千枚程に買求人あり。抑は何の益ぞや。我其用たる事を

しらす。凶年飢饉に逢て、これを以て寒士貧民を救ふといへども、一掬の米にしかざるべし。兵役軍陣に臨んでこれを以て敵をふせぐとも、更に一矢の用に代ふべからず。暴病沉痾を得て、是を煎じ服する共命を救ふべからず。然れば則用る所何事ぞや。名高き劍、故有る武具などは、武道の威光にもなる事なれば、有こそめでたけれ。

それさへあまりに玩べば、武道の本意をうしなふ事おほし。其外の用をうつはもの、しらぬむかしのふる反故を掛軸とし、いつの代より何にけがれたるもしれぬ茶碗・茶壺などを、上なきたからとして、限なき値を費し求めおく事、是ぞまことに物を玩べば、志をうしなふことわりなれ。人はふるきをもちひ、うつはものは新しきを用るとこそ、古きふみにも見え侍れ。古き書畫をこのむは、人の心畫なれば、さもありなん。器はたゞあたらしきこそ、いさぎよくしてよけれ。古き器は、ふるくそみたる口のけがれ、手のけがれいときたなし。ことさらやんとなき貴人などの、口にふれ手にもてあそぶべきものにあらず。善人こそ國の寶なるに、かゝる無益の物を賣と